

# オーダーメイドの太陽光で 世界を変える



赤、緑、青……。

地球上に様々な色があるのは、太陽の光の恩恵といえる。  
セリック株式会社は、その太陽光を人工的に作り出す  
照明器具SOLAXを開発・製造する照明器具メーカーだ。  
同社を訪ね、その技術の秘密や有用性について訊いた。

人工太陽照明灯 SOLAX 500W (左) と100W (右)。  
晴天時、正午±2時間に地表に到達する太陽光と同  
じスペクトルの光を出す。

カナダ生まれ、デンマーク育ち。ワーキング・ホリデー  
ビザで来日。滞在予定は6カ月だったが、大阪の人情  
と堺打刃物に魅せられ、日本が第二の故郷に。刃物メー  
カー勤務後独立し、「実際に触れて選べる」包丁選び  
のコンサルティングを提供する、ショールームタイプ  
の店舗「タワーナイブズ」を経営。  
<http://www.towerknives.com/>

包丁コンサルタント・和包丁専門店オーナー

## ビヨン・ハイバーク

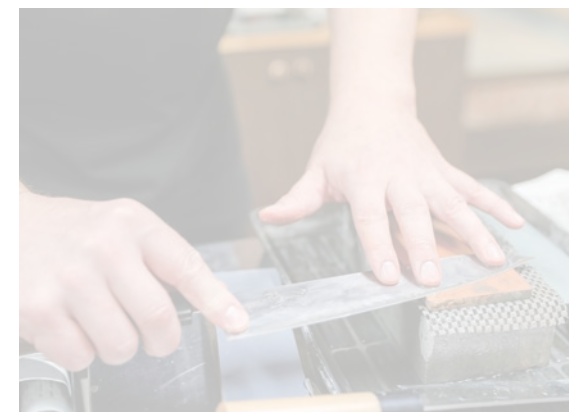
暮らしに口福を運ぶ和包丁  
その素晴らしさを世界に

世界から絶賛される「和包丁」は、  
職人が生み出す日本の伝統工芸品。今  
や、海外の星付きレストランのシェフ  
をはじめ、その品質の高さは広く知ら  
れ、輸出高は年々伸び、和包丁を購入  
する観光客も増えている。  
24年前に来日し、現在、大阪を中心  
に包丁コンサルタントとして活躍する  
ビヨン・ハイバークさんも、和包丁に  
魅せられた一人である。



「和包丁は、切れ味が見事。熟練の職  
人による、本当に良い品を知ってもら  
いたいと思い、私は国内外でその素晴  
らしさを伝え、応援しています」  
ハイバークさんの店では、300種  
類もの和包丁を展示している。野菜や  
肉、魚など用途に応じた和包丁の特徴  
や使い方、メンテナンスを説明するだ  
けでなく、自ら包丁を使って実演する。  
「私は、自分が納得できる本当に素晴  
らしい品を扱っています。それをわか  
かっていただくには、試してもらうの  
が一番。実際、スライスしたトマトを  
口にするとき、皆さん、驚きますよ」  
ありふれた食材が信じられないほど  
おいしく感じられるのは錯覚ではな  
い。鋭い切れ味が断面の凹凸を減らす  
ため、トマトのみずみずしさを損なわ  
ず、滑らかに切れるからである。  
「断面がきめ細かいと、調味料もしつ  
とり浸み込みます。つまり、良い包丁  
で料理すれば、刺身も野菜の煮つけも  
サラダもおいしくなります。しかも必  
要なメンテナンスを怠らなければ、40  
年も使えます。職人の手による『完璧

な道具』は少々値が張っても、その価  
値はあるのではないだろうか」  
大阪・堺をはじめとする様々な産地  
の和包丁を扱う専門店のほか、東京へ  
の出店、さらにつくり手の「職人」と  
使い手の「客」をつなげる「刃物工房」  
をオープンさせるなど、夢を次々と実  
現させてきたハイバークさん。その胸  
には、日本の手仕事への尊敬と、伝統  
の灯を消してはいけないという熱い想  
いが満ちている。

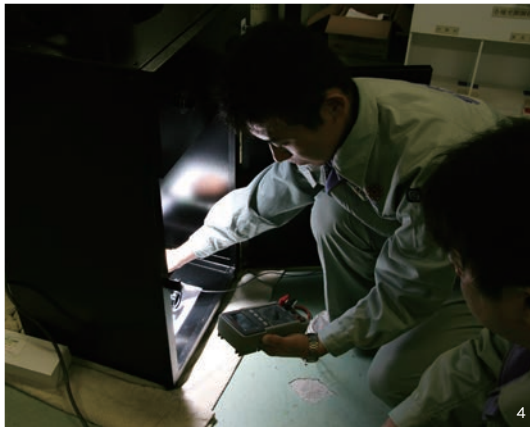
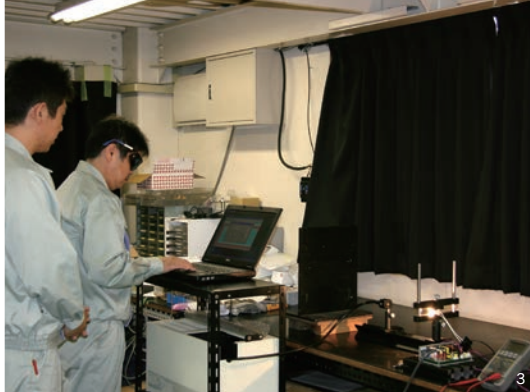


和包丁はこまめにメンテナ  
ンスを行うことで、その能力を  
発揮する。ハイバークさんの  
店では、研ぎ直しのほか、包  
丁研ぎ教室も開催し、使い方  
やメンテナンスの相談にも応  
じている。





1. 創業者（現会長）の佐藤泰司さん。
2. 太陽電池モジュール評価用のソーラーシミュレーター。
3. 新たな製品開発のため、キセノンランプの分光特性を測定。
4. 光源装置の照射強度を測定し、ムラがないことを確認する。
5. 太陽光同等の平行な光を出す「平行光照射装置」。



セリック株式会社  
代表取締役社長  
佐藤郁夫さん

## 太陽の光は 色彩評価のものさし

セリック株式会社の照明器具「人工太陽照明灯 SOLAX（ソーラックス）」の光は、晴天の日の午前10〜午後2時に地球に届く太陽光と同じ特性を持つ。その有用性について、セリック株式会社代表取締役社長の佐藤郁夫さんは次のように話す。

「蛍光灯や白熱電球などの一般的な照明ではすべての色を正確に見ることができず、JISでは『太陽光の下で見た色を正確な色とする』と定義されています。そこで私たちが自然太陽光に代わる色彩評価の『ものさし』としてお勧めするのがSOLAXです」

現在でも色彩評価や調色は、目視検査で確認を行うことが少なくない。その際、光源として使われてきたのが、すべての色が連続的

に含まれる太陽光である。昔から色にこだわる画家などは、太陽光の下で制作を行ってきた。だが、太陽は昼しか出ないし、雨や曇りの日もある。24時間365日いつでも太陽光を提供できるのがSOLAXだ。

## 子どもの頃の体験から 人工太陽照明灯を開発

そもそもセリックは、佐藤さんの父である創業者の佐藤泰司さんが、人工的に太陽光をつくらうと設立した会社だ。

「中学生の時に絵を描く宿題があり、夜に白熱電球の下で描いたそうですが、翌日太陽の下で見たら全然違う絵に見えたそうです。その後、船舶用サーチライトの開発でキセノンランプと出会い、これを使えば子どもの頃夢に描いた太陽の光を自らの手でつくれる、と一念発起して立ち上げたのが当社です」

キセノンランプが太陽光に近い光源であることは以前から知られていたが、照明として使用するには大きな欠点があった。それは、特殊で大型の電源装置が必要なこと、そして紫外線が多く出ることだった。

泰司さんは、当時登場した半導体を利用すれば電源装置を小型化でき、フィルターを用いることで、波長を調整して紫外線を取り除くことができる考えたのだ。

「太陽光の色を実現するためにキセノンランプにフィルターを付けるのですが、そのためには6種類のフィルターが必要でした。ところが6枚のフィルターを重ねると、光が弱く

なってしまう。そこでフィルターの成分（金属）を1枚のフィルターに蒸着するという方法を考えました」

ところが6枚のフィルターを1枚にするというのはフィルターメーカーにとっても困難な挑戦であり、完成までには大変な苦労があったという。

## 様々なオーダーに ノウハウを蓄積

創業から2年、1986年に「XP-300 形人工太陽照明灯 SOLAX」を発表すると様々な業界から反応があった。

写真フィルムメーカーからの相談は、人工太陽照明灯をセットした撮影スタジオをつくれなにかというものだった。フィルムメーカーは、自社フィルムのアピールのためにモデル撮影を行うが、太陽光の下での撮影が必要のため、撮影日には羽田空港に集合。その日、天気予報で晴れとされる場所にスタッフ全員で飛び、撮影を行っていたという。その費用は膨大で、スタジオをつくるほうが経済的で効率もよいというのだ。

さらに大口の顧客となったのが自動車業界。車体の塗装の色合わせは従来の照明では難しく、太陽と同じ光で検査する必要があるからだ。

中には、光の成分を変えることができないかという相談もある。例えば、色を見るだけなら紫外線は必要ないため、紫外線を除去してほしいという要望だ。他方、太陽光で塗装



光源によって色が変わって見えることを示す比較装置。右:SOLAX、中央:蛍光灯、左:白熱灯。



持ち運び用に開発されたSOLAX-iO。LEDを使用した充電式コードレスのため、狭い場所や光が届きにくい場所でも色彩評価が可能となる。

などがどう変化するかという曝露試験の場合には紫外線は絶対に必要になる。既製品ではなくオーダーメイドの製品は売り上げの約半分を占めるという。こうして顧客のオーダーに応じて製品を開発していく中で、セリックには様々なノウハウが蓄積された。

「ある業界では当たり前だったが、他の業界では画期的と受け止められることがありますが。多くの分野で経験を積んできたことが当社の強みとなりました」

現在、同社の製品の導入が進んでいるのがカーエレクトロニクス業界だという。

「車の自動運転は、センサーやカメラで周囲の状況を把握して自動制御を行います。センサーやカメラに太陽の光が差し込んだ時にどうなるか、真っ暗な中でどう判断するかといった研究にもSOLAXが活用されています」

時代の最先端の研究分野にも活用されるSOLAX。今後は海外への販売も本格的にスタートする予定で、まず中国とトルコに拠点を設け、輸出を本格化するという。オーダーメイドの太陽光がどのように評価されるのか。期待は高まっている。

### セリック株式会社

1984年創業の電気機械メーカー。1986年に世界で初めて人工太陽照明灯SOLAXを開発。美術館・百貨店・電機機器・写真工業・自動車メーカー・化粧品・塗料調色・医療など幅広い業種・業界で使われている。創業者でSOLAXを開発した佐藤泰司氏は、黄綬褒章、東久邇宮記念賞、科学技術庁長官賞などを受賞・受賞。  
<http://www.serikk.co.jp/>